

大失敗した時も支えられている
(年取るといふこと日誌から)

CL教育研究会 遠間美保子
amhotm@gmail.com <http://docl.jp>



2013/11/8

人生はおもしろいとときどき思う。気になることで頭が悩まされてもおもしろいと思うときがある。いろいろな人がいる。へえーと感心する人がたくさんいる。俳優の寅さんとか、赤白の水玉模様だけ描いて世界的に有名な芸術家草間弥生。

幼い子供が「どうして?」「これなに?」「どこ?」おとなに?攻めする。大人だって答えがないことが多い。そこから大人は深く考える探究心が起きて生活がおもしろくなる。

毎日おもしろいことに出くわす。でも2011年3/11から一番おもしろくない、人生にはあってほしくないものが生まれた。放射能。受け入れたくなくても認めたくなくても、色、匂い、音、味もなく、見ることも、聞くことも、かぐことも、なめることも、触ることもできないのに四六時中、そこらじゅうに確かにある。幽霊よりずうっと怖い。永遠にある一番面白くないもの。でもあると認めるしかない。そんな怖い面白くないものがいつもある中でおもしろいものをみつける。

2013/12/8

九十歳に近そうな紫色の鉢型ハットを深くかぶって顔が隠れ、前かがみで下向きに歩いている女性。その左腕を抱えた、杖をついて八十代の女性が参道をそろそろと歩いている。どちらかが「このところ右ひざのご機嫌が悪くって…」「私は左膝の…」二人の会話が聞こえてくる。(へえー、膝の機嫌とは初めて聞く)。私は右ひざがときどき痛いと感じるが、こんな風に表現すると自分の体の部分ではなく、どちらさまかの他人のようで、注意がうちに向きやすい神経質な痛みが自分からはずれてしまうよう。どこかしらに痛みがある高齢の体を美しい言葉であらわすお年寄り美しい。

2014/01/01

元旦の朝、初詣の人たちが神社の本堂に向かって4列縦隊で並んでいる。境内のフェンスに印刷された厄年の早見表が貼ってあった。便利さに価値が置かれる現代だが、これまでもすぐにわかる効果をねらうとは、やはり神頼みも儲け主義と知る。

2014/03/6

京成駅裏の路地で向かいから高齢の夫婦が歩いてくる。駅の方に曲がる路地にずっと旦那さんが左に曲がった。まっすぐにこちらに歩いてきた奥さんが「どこいっちゃうのー」と叫んだ。その声に促されて元の道に戻ってきた旦那さん、頭をかきかき照れ笑いしながら「まいっちゃうなー」「おかしいんじゃないのー」と奥さんはやんわりたしなめながら二人そろって歩き去った。微笑ましさを心にいただいて足取り軽くウォーキングを続ける。「ありがとさん」。

2014/03/10

家事と煮物をしてからウォーキングに出る。冷たい風が強く真冬のように。3、40分歩いて突然、鍋を

かけたままコンロの火を消してこなかったことを思い出した。夫が家に居るがこげても鼻アレルギーで匂いがわからない。この時間は二階のコンピューターの前に座っていて、鍋に火がついているのに気づかないかもしれない。早く電話をしなければと公衆電話を捜すが、大通りに出て見回しても見当たらない。少し早足で目的地の寺院に向かうが、墓地や空き地がある細い道で10分ほど、だれかに携帯を借りようか、借りられそうな店とかはないか探しながらウォーキングを続ける。寺院の裏にある認知症介護病院の前にさしかかり、病院なら公衆電話があるかもしれないと入口に向かう。

帽子とサングラスを取って、自動ドアを入るとナースステーションがあるが、ガラス窓がしまっていて、電話機は見当たらない。奥には広いスペースのラウンジに椅子がたくさん並べてあって、20人ほどの高齢者が座って看護師さんが話しかけている。お掃除の人に聞くとわからないので、ナースステーションに聞くよう教えてくれる。仕事を邪魔して申し訳なく頭を下げて聞くと、ぐるりと回った反対側にあり、わざわざドアから出てきて場所と「カードではありませんよ」と教えてくれる。幸いお賽銭用に硬貨を持っていた。すでに家をでてから一時間経つ。夫に「こげたかもしれない」と電話をしてコンロの火を消してもらう。

入った自動ドアを出ようとするが、何度試みても開かず、横の小さなドアも鍵がかかっている。ここの患者にふさわしいと事実さまが足止めのいたずらをしているのか。とナースステーションの窓ガラスが開いてスタッフの人が「付き添いの方ですか」と聞くので、事情を話すと「ドアの前に立つと開きますから」とドアが開くようにしてくれた。そうか、この自動ドアは外からは入れても中から患者さんが間違えて出てしまわないように操作してあると知った。新しいことを知ったが、再度訪れることはないだろう…が…。ともかく火事の心配はなくなったので、いつもどおりに目的地まで歩いて帰宅する。すっかり焦げている煮物と鍋を想像したが、汗気がなくなっていただけだった。大失敗したのにたくさんの事実にもいつも通り支えられて有り難い。

2014/03/21

春日和だが北国は吹雪模様で、そこからの強い北風で冷たい朝、黒のジャンパーの前をはだけた、頭を短く刈った小太りの若者がジャンパーのポケットに両手をつっこんで、パタンパタンと足音をたてて前を歩いていく。

足元を見ると白いスニーカーの紐を結ばず道にたれたまま引きずっている。掃除をしない散らかった部屋に住んでいるのではと想像が湧く。

すると突然、神社の門前できちんと足をそろえて頭を下げてお参りした。福助顔のその青年の目はきりっとして利発に見えた。人間はときどきだらしなく、ときどききちんとしている。一つの態度や行動だけを見て、ラベルを貼るのは事実ではなく、危ないあぶない。心でごめんなさいと謝って通り過ぎる。

(千葉県市川市CLインストラクター)

 [目次へ戻る](#)